

氏名	菅野 裕佳子
所属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	健博 第141号
学位授与の日付	平成30年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力測定尺度の開発
論文審査委員	主査 教授 勝野 とわ子 委員 教授 河原 加代子 委員 教授 習田 明裕 委員 名誉教授 志自岐 康子(元首都大学東京教授)

## 【論文の内容の要旨】

### I. 研究目的

認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力測定尺度（以下、尺度）を開発し、信頼性、妥当性を検証すること、及び認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力に関連する要因を探索することであった。

### II. 研究方法

第一に、認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力という概念について、3つの段階（理論的段階、フィールドワークの段階、分析的段階）で構成されるHybrid Modelによる概念分析を行った。

第二に、概念分析の結果に基づき概念枠組みを作成し、4つの下位概念と38項目の尺度の暫定試案を作成した。予備調査は、有意抽出法により、日本の急性期病院1施設の臨床看護師247名を対象に郵送調査を実施し、37項目の尺度の試案を作成した。本調査は、クラスター抽出法により、日本の地域医療支援病院20施設の臨床看護師600名を対象に郵送調査を実施し、回答の得られた臨床看護師303名（有効回答率50.5%）を分析した。尺度の内的整合性の検証にはCronbach's  $\alpha$ 係数を確認し、因子構造の検証には探索的因子分析及び確認的因子分析を、基準関連妥当性の検証には黒田本質的直観尺度、日本語版Consideration of Future Consequences(以下、CFC)-14を用いた。弁別的妥当性の検証として、臨床看護師と認知症看護認定看護師の尺度得点の差を確認した。構成概念間の関係

の検証には共分散構造分析を行った。

最後に、認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力と関連する要因を探索した。

### Ⅲ. 結果と考察

Hybrid Modelによる概念分析は、理論的段階では文献検討から看護師の臨床における先見力という概念の本質的特徴を見出し、フィールドワークの段階では参与観察とインタビュー調査を行った。認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力という概念について得られたデータを質的に分析した結果、38のコード、10のサブカテゴリー、4つのカテゴリーが抽出された。分析的段階ではそれらの結果を統合し、その概念を、「認知機能が低下している高齢患者と家族に起こりそうな出来事や危機を予想し、その予想からより妥当な判断と行為を導く能力であり、予想外の出来事に気づく能力である」と定義した。Hybrid Modelによる概念分析は、臨床の看護実践から、認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力を豊かに見出すことを可能にし、看護師の思考と行為の能力としてこの概念をとらえることを可能にしたと考えられた。

37項目の尺度の試案について、項目分析と因子分析（プロマックス斜交回転法）の結果、尺度は、【予想からより妥当な判断と行為を導くこと】【認知機能が低下している高齢患者の潜在リスクの予想】【認知機能が低下している高齢患者と家族の今後の生活の予想】【認知機能が低下している高齢患者と家族の予想外の出来事に気づくこと】【認知機能低下を呈する高齢患者への対応が適切でない可能性の予想】の5因子構造の23項目からなる尺度となった。Cronbach's  $\alpha$ 係数は、尺度全体は.91と高く、下位尺度は第1因子から順に.87、.83、.82、.75、.67であった。基準関連妥当性は、尺度の合計得点と黒田本質的直観尺度とは有意な正の相関 ( $r = .49, p < .01$ ) が、尺度の合計得点と日本語版CFC-14の【未来の結果熟慮】とは有意な正の相関 ( $r = .30, p < .01$ ) がみられた。弁別的妥当性は、認知症看護認定看護師 ( $N = 211$ ) の尺度の合計得点及び全下位尺度得点は、臨床看護師 ( $N = 303$ ) と比べて有意に高かった ( $p < .001$ )。確認的因子分析の結果、尺度のモデルは適合度指標が許容範囲であり、尺度は5つの下位尺度で測定できることを確認した。尺度の構成概念間の関係を検証した結果、【認知機能が低下している高齢患者と家族の今後の生活の予想】が外生変数として示され、認知機能が低下している高齢患者への臨床における先見力を発揮するうえで、患者と家族の今後の生活を予想できることの重要性が定量的に示された。尺度の合計得点との関連では、認知症看護経験年数 ( $r_s = .38, p < .01$ )、臨床経験年数 ( $r_s = .39, p < .01$ )、認知症高齢者に対する意識と態度 ( $r = .22, p < .01$ )、認知症高齢者の日常生活自立度 ( $r_s = .12, p < .05$ ) と正の相関がみられた。尺度の合計得点は、認知症看護に関する継続教育の受講有りのほうが受講無しと比べて有意に高く ( $p = .042$ )、継続教育の重要性が示唆された。また、患者の昼夜逆転出現の頻度は、尺度の高得点群と低得点群間では高得点群のほうが有意に低かったことから ( $p = .033$ )、認知

機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力の発揮は、患者の昼夜逆転を予防することが示唆された。

#### IV. 結論

Hybrid Modelによる概念分析の結果に基づく認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力測定尺度は、信頼性、妥当性が検証され、尺度全体として適用可能な尺度と考えられた。認知機能が低下している高齢患者への看護師の臨床における先見力を育成するためには、患者と家族の生活をより豊かにイメージできるような継続教育内容を検討し、看護の専門性を発揮するためには、組織体制を整備する必要性が示唆された。